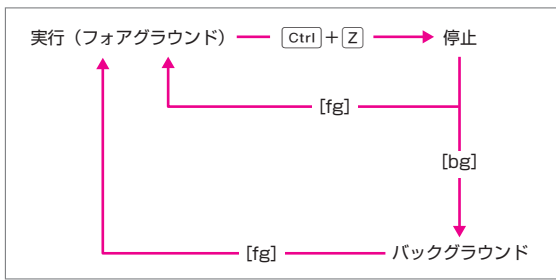


Part 3 Linux の基本操作に慣れよう

▼フォアグラウンドジョブを停止してバックグラウンドで実行

```
$ sleep 100 ← sleep コマンドで 100 秒待つジョブを作成する
^Z ← [Ctrl] + [Z] を入力
[1]+ 停止 sleep 100 ← 「停止した」とシェルが出力する
$ bg 1 ← 停止しているジョブ ID[1] をバックグラウンドで実行する
[1]+ sleep 100 & ← バックグラウンドで実行開始とシェルが出力する
$ jobs ← ジョブ一覧を出力するコマンド
[1]+ 実行中 sleep 100 & ← バックグラウンドで実行中であることが「&」でわかる
$ ← 特に何も行ってない
[1]+ 終了 sleep 100 ← 実行が完了すると「終了した」とシェルが出力する
```

ジョブを管理するコマンドである `fg` コマンド、`bg` コマンド、`jobs` コマンドは **3-3-5** で使い方を説明します。また、これらのコマンドでジョブのライフサイクルを表すと、**図 3-17** のようになります。



▲ 図 3-17 ジョブのライフサイクル

3-3-4 環境変数

Linux システムでよく使われる変数には、**シェル変数**と**環境変数**があります。

環境変数は、システム側で用意しているデータ共有やプロセスの動作を変更するために利用する変数です。シェル変数は実行中のシェル内でのみ有効となる変数で、そのシェルが終了したあとは変数を参照できません。環境変数はシェル内で定義ができ、そのシェルから実行した別プロセスからも利用できます。

環境変数やシェル変数は「**\$ 変数名**」で参照することができます。以下の例のように、シェル変数をシェルで作成してから `export` コマンドを実行すると、環境変数にすることができます。

▼シェル変数を環境変数にする例

```
$ TEST="test value" ← シェル変数に「test value」を代入する
$ export TEST ← シェル変数を環境変数にする
$ echo $TEST ← 変数の値を参照する
test value
```

システムに設定されている環境変数は、以下の例のように `env` コマンドで一覧表示することができます。